

tab

No.
7
2007
/11
/15

木村和史	野村龍
後藤美和子	長尾高弘
高野五韻	鈴木夕伽莉
石川和広	倉田良成

楳 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：水の林／01
石川和広：精神の木／永遠／02
長尾高弘：机上の水練／05
野村龍：オレンジ／07
鈴川夕伽莉：鯨幕／09
倉田良成：ねがってはいけない夢／12
高野五韻：光台・追放／14

文

- 木村和史：普通の人／17
倉田良成：詩、憑依、道徳―佐々本果歩詩集『姉妹』について／20

あとがき集／23

画：和田彰

tab 第7号／2007年11月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

T2300078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷イツ 201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp

WAS GEHT
AN WEG? IM
(HM) WOHLE IM KOPF HERUM?

herum?

Text from a purple label, partially obscured and illegible.

DAS
KLANGEN
DE
LIED

11/11
2007



後藤美和子

水の林

手のひらは温かかった

滲んだ色をしていた

かがんで待つ冒頭の時

波は立たず

落ちるしずくもない

まっすぐに私を見た

粘土でこねた顔をしていた

大きな右手を差し伸べてくれた

それは温かかった

この手を包み込んだまま

そろりと立ち上がった

木々の間へ消えていった

私の手は

持っていていかれた

皆既蝕三八号

石川和広

精神の木／永遠

僕は兵士を知らなかった

いや正確に言えば知っていたので

それは祖父である

僕が覚えているのはひとりの年寄りであった

心でどこまでも、その感触をたどることができたら

きっとそれが夢に似ているとしても

本当であるから

真であるから

と思っっているが

祖父の風呂上りの姿は

なんとなくもう不鮮明だ

帝國の臣民であった、招集された

祖父は輸送船に乗ってたぶん南方に向かった

笑っている祖父の頬にはやくざのように

(祖父はカタギである)

一本の溝ができていた

風呂上りの祖父の太ももには

シミズバレが何cmも続いていた

密林の空気を切り裂く弾丸がえぐった溝は

僕の戦争のイメージを形づくる数本の線である

その弾丸が祖父の組織を破壊するとき

それを発射したものを恨まないでおこうという倫理が

僕には親しい

その弾丸がどこから来てどこへ落ちたとしても

その弾丸の音と光と血と泥と切り裂かれる空気の記憶は
祖父がこたつで眠っている姿と近いし遠い

あらゆる死んだ彼の総体が消えていく波間の中に

僕の薄れていく記憶の奥に

ほんのひとつとして弾丸は転がる

わずかな柱であり精神の一本の木がそこに生えるなら

そこから現在の知らない国の誰かの姿を

想像することは咎められるだろうか

どうでしょうか

世界があちらとこちらに

分かたれる線をもつなら

あちらにある人にとって

それを抑圧と排除と呼ぶことは

ごく自然に思える

あちら側にある人に対して

こちらの人はいくらでも

マイナスのイメージをふくらますことができる

僕はそんなふうに単純に考えることしかできない

でも線なんて地図上の線と同じで観念でしかないから

誰だって線をまたいでしまっている

どこにでも敵はいることができる

その線を消すには（果たしてどこを線とよぶのか）

未だあちらの人を消去して線が無効化するという方法がとられている

僕たちはなにかを守ろうと寝ずの番を続ける

不意に眠りこけることが続く

眠っているときと起きているときの

区別がつかない

いつまでも夢であるような、そんなときから

僕も何かのきっかけで心を病んでしまった

という物語も想像できる

荒地にベッドを置く

地雷が炸裂する

国においてきた女のことを思う

あらゆる花は砂に変わる

空に飛行機が飛ぶとき空に線はない

(飛行機雲が作るのは消えゆく破線)

いつまでもつながることができないから

ふれることができないから何度も建物は火を噴き

死んでは再生する魂が跡形もなく繰り返して消えていく

景色が見えてしまう

机上の水練

思いがけず泳げと言われた。

今までに泳いだことは確かにあったはずだが、
どうやって泳いだらいいのか、

正式に教わったことはないのだ。

だから、いざ泳ぎ始めたときに、

泳ぎ方を思い出せるかとても不安だ。

今のうちにちよつと思いついてみようか。

でも、水に入る前に思い出せなかったら、

恐くて水に入れなくなってしまいうだろう。

余計なことはしない方がよいのではないか。

案ずるより産むが易いともいうぞ。

過去にはそれでうまくいったこともある。

問題は泳ぎ出してから声をかけられたらどうするかだ。

接客業の常として、

明るい笑顔でハイと返事をしなければならぬところだ。

そのときに泳ぎ方を忘れたらどうしよう。

それとも、接客業はもうやめたんだっけ。

今でも思い出せないのに、

泳いでいるときに思い出せるのだろうか。

まあいい。

最悪の場合を想定しておくのが社会人の常識というものだ。

泳ぎ始めてしまったのに、

途中で声をかけられて返事をしたばかりに、

泳ぎ方を忘れたとする。

前に進めなくなっても浮いていた方がいいのか、

それとも沈んだ方がいいのか。

接客業的にはどうなのか考えておこう。

それとも、接客業はもうやめたんだっけ。

そういったことも十秒ほどのうちに考えて、

地面から足が離れたのが今の状態だ。

ところで、水があるのを確かめたっけ？

野村龍

オレンジ

魔方陣の真ん中で

誰を待っているの？

さようなら

冥王星は 今

静かに膨らみつつあります

Laforgue が 音もなく燃える

燃え盛る

あれから

もう四十年も経つのに

まだ

子供が微笑むんだよ

(お陰で

独りにはなれたのだけれど)

君の髪と瞳は

相変わらず草色なんだろうか

通り雨は

御使いが深呼吸したしるし

さあ、

残り香に、

挨拶しよう

こんにちは。

鯨幕

「お亡くなり」って

それが何で彼女の名前の枕詞なの？

同窓会のメーリングリストが

数年ぶりに来たと思ったら

夕方久しぶりの0番ホームに立つ

背後で訛った少女達がはしやぎ

あの町の数年前まで引きずり戻される

一時間ちよつとで視界を奪われる

雪雪

雪雪雪

家家は肩を寄せ合い

それぞれの灯火にはそれぞれの命が

互いの距離感について

安堵なり憎悪なりを蓄積させている

のだろうか

吹雪の駅前ロータリーにて

シルバーのPOLLOが辛うじて点灯

友達だ（この子は生きている）

こんなことでもなければ

三年だって五年だって

会わないところだった

まずコンビニに寄る

ふたりともストッキングが伝線

今日ほど「久しぶり」という事実を

有難いと思う日はないだろう

「懐かしい」話題には事欠かないからね

でも到着すれば

葬儀場こんなところにあっただねえって

そこだけ私達の世界が一新されたのだ

黒服の集団は同級生達

案内ありがとう

そうか私達の服装だって

この場にぴったりだ

ところで彼女に会いに来たのだよ

彼女によく似たこの遺体は

何故白粉してる？

彼女は普段、化粧なんてしなかった筈だよ

あんたは彼女じゃない

とても冥福なんて祈れやしない日だ

明日も仕事だからもうお暇します

駅へ向かう車の中

会話の中で同級生の名前を取り違えた

教授の名前を忘れていた

どんだん歯抜けになる記憶

彼女については「死んだ」という

未確認の事実により

辛うじて遺棄を逃れたというのか

友達にさようならを言う

駅前ロータリー

「ゆかりは変わっていないみたいで良かった」
そんな風に言わないでよ

老朽列車はふたたび夜を裂く

こんな時間だから家家の灯火まばらで

眠っているだけなのか誰もいないのか

これが最終便だからもう確認出来ない

(初出 文学極道 二〇〇五年)

ねがつてはいけない夢

—堀川正美に捧ぐ10

おおきな風船がいくつもいくつも揚がる

休日はそれじたい外部をもたない孤独な風船だ

おんがくは鳴るか、ハイ・ヌーンを知らせる十月のかねのねの内部で

祭りの地に降りることをゆるされない、青をただよう

ダイヤモンド・ダストみたいにきらめいている針の鳥たち

地上では

自転車乗りを練習する幼い息子と若い父が、かぎりなくちいさく

絶対のさびしさのなかで夕ぐれまで遊ぶ、そのぎんいろの水飲み場への距離

公園をかこむ樹木はふしくれだち、青空へたかく、ほとんど不壊の相貌で

おそろしい柵、その外側には脱出できない、われわれは鳥のように

辺際をつくし、ただいっさいの内部を飛ぶだけだ

断頭台の刃のように秋の日はとつぜんやって来て、想い出となったきのうが

にぶいろのくさむらに金の声をれうれうとこぼす

雨の午後の階段から傘がつぎつぎにひらく彩りを見下ろして

白いスカーフをしている、さっきまで雨だったから

なつかしい女に声をかける

メガフォンを手にしたイタリアの監督みたいに

雨という名のががやきや炸裂は夏の島とともに去ったんだ

ならば

鯨に象の墓場のような他界へのいりぐちはあるのだろうか

わだつみのいろこの国へゆく

いま五十年前に必死に叩きつづけられたモールス信号がかすかに届きはじめている

碧の軀にとうめいな羽をふるわせてうたうカナカナのかなしみのように

いま鮮烈なにじ色の雲塊の下に入ってゆく木造船

いま、亡滅が気づかれはじめるなものか

ゆたかな流れにナイフのような影が走る

家を出てすぐ

小魚や水草のおののきを見ることは、きつと
かなうことをねがってはいけない夢なんだ*

階段を下りると町はいつとき

パン工房のように匂う

善きもの

子どもらを

マトリクス回路のみちばたへ焚き木のように棄て児して

夜、ぞんぶんに光って

*木村和史『沖繩へ』(「CASCO」no.6)より。

光台

理想都市になるはずだった場所

なにかをむしり取られたことが明らか

ただ広い地面からは

赤ばんだいたみのあとが

消えない

この部屋の

ひとびとのりんかくが

白く輝いているのは

大きな窓の向こうの

春の曇天の明るさのせい

フォークを止めて

外を眺めるとき

かれらの明るいあごが

少し上がる

奇妙な建造物が

さびしげに

散在する荒野と

それを縁どる

いいかげんな緑色と

その上に乗る

退屈な空の

その向こう側をみようとして

追放

出町柳発淀屋橋行き京阪特急の

西日射す暖かい車内

天井のスピーカーから車掌の声が出た

・・・駅構内や車内での暴力行為や痴漢は犯罪です・・・

・・・迷惑行為の追放にご協力下さい・・・

眼を閉じると

追放された

迷惑行為たちの影が見える

相寄り添って

冥い枯れ野に行く

暴力と痴漢

遠山に日の当りたる枯野哉*

木枯らしに吹かれながら

二人は寂しげに言葉をかかず

(そして悪は一層深まっていく)

やがて夕闇に溶け判然としなくなる二人の姿

こころの荒野が開発し尽くされ
すべてが都市に変わる頃
僕らはもう一度彼らに会うだろう

郊外のまちで

恐怖することだろう

*高濱虚子による

(詩集『馬鹿と煙』より)

普通の人

整体に通うようになって十年になる。友人が先生を紹介してくれたのだが、なかなか踏ん切りがつかなくて、結局、先生のところに電話を入れたのは三年も経ってからだった。

そのころわたしは、知的障害や発達障害の人たちの小規模福祉作業所で働いていて、幾つかの深刻な悩みを抱えていた。今になって振り返ると、そんなに深刻に考える必要はなかったと思えるし、今ならもつとうまくやれるのにと悔いることも多いのだが、それは今だから言えることで、当時のわたしとしてはたくさんの間違いを重ねながらも、体当たりで頑張っていたのではないかと思う。そして当然のように力尽きた、というべきか。

「木村さん、あの頃は背中に二枚くらい座布団を背負っていましたよね」と、何年か経って、年下の兄弟子がわたしに言った。

何年かの勉強によってようやく背中が軽くなったことを、兄弟子は素直に喜んでくれたわけだが、整体を勉強しながら座布団の数が増えていくのでは、たしかになんのための勉強か分からない。背中だけでなく、体のあらゆる部分が軽くなってくれれば、総体としてのわたしも自在にのびのびと生きることができる、はずなのだ。座布団を背負うことは体によくない。体を歪め、精神も歪めることになる。ゆつくりでいいから、座布団をはがしていきましよう、というのが整体の勉強会の自然な流れだと思う。修行を積んだ人の目から見ると、悪いところは悪く見え、良いところは良く見えるのは自然なことらしい。整体に限らず、いいものを基準に育てられた目は、悪いものを見分ける力をおそらく自然に養っていくのだろう。

自分で自分の体を理解することは、なぜか分からないが、難しい。外見に気を使うこと

はしばしばあっても、健康であるかぎり、体の内部のことはほとんど考えないのがごく普通の生き方ではないだろうか。自身の体を意識しないことが普通の生活で、意識し始めたときには、ちよつと普通でない生活が始まっている、とも言えるかも知れない。

わたしが整体に通い始めたのはもちろん、ちよつと普通でない生活をしていたからで、自分の体を理解したいという明るい動機のためではなかった。不調を感じていても、どこをどうしていいのかわからない状態の人間にとつて、それをすつきり治してくれる人とめぐり合えるのが理想だろうが、体のことに熟練している人に、自分の体がどんな状態か教えてもらうのもまた悪くないと思う。

勉強会の目的は、わたしなりに要約すると、歪んだ体を正すことと歪まないような体の使い方を習得することのふたつではないかと思う。

体（頭も）の使い方が悪い、と先生によく叱られるのだが、いい使い方をすれば、どんな現実においても悪い体にはならない、と理想的には言えるだろう。ただ、いい使い方を習得できたころにはわたしの現実が終わりかけているかも知れないし、苛酷な現実が体の使い方など考慮する余地を与えないということもごく普通に起こり得る。

勉強会では体をよくする方向だけを向いていると言えるが、その一方で、わたしの歪んだ体と、そのような体を作ったわたしの現実をそう簡単には否定したくない気持ちも残る。このこだわりがわたしの上達を妨げる一因になつていくような気がするが、なかなか割り切ることができない。気持がいつも、歪んだ現実の歪んだわたしに帰って行こうとする。もしもわたしが作業所で座布団を背負い込ん

だのだとしたら、作業所での生活はわたしにとつてよくないことだったのだろうか。たとえ体によくなかったとしても、わたしにとつて大切な体験だったその時間を否定する気持にはなれない。無かった方がよかったと考えることはできないのだ。それどころか、年齢的にはもう無理だけれども、縁があればいつでもまた戻って行きたいと思っている。勉強会と現実とは、行きつ戻りつして初めて意味のあるものになる。ふたたび作業所に戻って、今度は座布団を背負い込まずに済んだら、そのときは勉強が自分のものになったということだろう。

全体の勉強会に十年通って、体の使い方をいろいろ学んできたはずだが、情けないことにほとんど身につけていない。いまだに、よく分かっていないのである。真面目な弟子をやっていないので仕方がないのだが、それでも整体のおかげで、それまで考えもしなかった視点から、体と自分自身を見つめることができるようになったと思う。何かが分かったということではない。体の構造や機能の知識を身につけたわけでもない。ただなんとなく自分や他の人の体を見つめている、自分や相手の体そのものを感じている。普段の生活で、もうこれ以上は無理だと感じると体が自然に止まろうとする、というような、ごくごく初步的な基本姿勢のようなものが、幾らか身につけてくれたような気がする。勉強させてもらってよかったと思えることが確かにあるのだ。

にもかかわらずこの十年、うつすらとした憂鬱がわたしの中から消えてくれようとしている。先生にも仲間たちにもよくしてもらっているのに、いつもどこか距離を置いて関わっている自分を感じる。そのことは先生も感じ取っていて、「木村さんは頑固だからなあ」と姉弟子たちにこぼすこともあるようだ。

わたしはじつは三回（も）、破門され（かけ）ている。弟子という言い方をしているが、勉強会のひとりの生徒に過ぎないわたしが、破門などというのは大袈裟かも知れない。が、

確かに先生の怒りをもって、破門だあ、と宣告されているのである。そのたびに、詫びを入れたわけでもないのに許されているのは先生の懐の深さのおかげとも言えるし、わたしの頑固勝ちとも言えそうだ。

三度目に破門されかけたとき、ふたりの姉弟子が心配して来てくれて、わたしをなんとか説得し改心させようとした。そのときの姉弟子たちの言葉は、「先生を信じていないの？」「先生だって絶対じゃないんだよ」というものだった。

このふたつの言葉を、姉弟子たちはおそくなんの矛盾もなく使ったと思う。先生を信じて、真面目に整体と向き合って、もっといい方向へ自分の体を変えていきなさい、先生だって間違ふことがあるんだから、そのときは遠慮しないで言えばいいじゃない、というまっとうなアドバイスだったと思う。

姉弟子たちの気持ちを素直に受け入れることは別に、そのときわたしのなかにはこんな思いがあった。「絶対じゃない人を信じることはできるだろうか」「姉弟子たちは、絶対じゃない先生をありのまま理解することと、絶対的に信じることをそんなにうまく、抵抗なくやれているのだろうか」「やれているとしたら、それはおかしいのではないか。信じることを、なぜ最初に持つてこないといけないのだろうか。それは、あとからついてくるのが自然なものだし、そもそも信じる必要などあるのだろうか。」

わたしの憂鬱は、多分、姉弟子たちが先生を信じれば信じるほど、霧のように漂ってくるもののような気がしてならない。人を信じることができないわたしは、とは違ふと思う。わたしにも多分、人を信じる力はある。三度目の破門のとき、わたしははつきりと辞める覚悟を決めていた。先生の力を借りずにひとりで自分の体を考えることはできないと思っていたし、この先どんな体になつてしまふか不安だったが、気持は固まっていた。自分自身の頭で考える。たとえそれが、気の通らないかばちや頭であったとしても。もつ

とちやんと話そうと先生が言っている、と姉弟子たちがまたやってきて、わたしの覚悟はとりあえず、次回の破門までは不要なものとなったのだけれども。

かつて、もう十五年以上も前のことになるが、ある人に、「弟子にしていただけですか」とお願いしたことがある。

国技系でも伝統芸能系でもない人間が、そのような言葉を本気で口にする機会は一生涯に一度もないのが普通ではないだろうか。わたしにしても、弟子になるといふ言葉を本来の意味で使ったのはそのときが初めてで、おそらく（まだ少し残り時間はあるけれども）二度とないと思う。（全体の勉強会は、参加させてもらっているだけで、弟子として修行しているわけではない。）

交通事故で三ヶ月の入院生活を送ったあと、手技治療の先生に体を診ていただいていたのだが、一年ほど経ったある日、その先生に弟子にしてくださいとお願いをしたのだった。考えに考えたすえの、迷いに迷ったすえの決断などではなかった。ごく自然になんのためらいもなく、その言葉がわたしの口をついて出た。

先生はそのとき、連れ合いの人と海外へ長い旅に出ようとしていたし、わたしも家族と離れて弟子入りすることなど、実際には不可能だと分かっていた。できないと分かっている口にした、軽はずみと咎められても仕方のない言葉だけのお願이었다。それなのに、不思議なことに、わたしのなかに臆する気持は少しもなかった。

先生は、わずかな間をおいたあと、「いいですよ」と穏やかな笑顔で応じてくれた。

気持に押し出されるようにその言葉を口にしたわたしの、その気持だけに向かって言葉を返してくれたのではないだろうか。

畏敬すべき先生にはあるが、それよりも普通の人に普通の人として、わたしの気持を伝えたかったのだと思う。信じるとか信じないとか、気持にとって異質なはずのものなど持ち込まずに、気持だけで言葉がかわされ

たかけがえのない瞬間として、そのときの短い時間はわたしのなかで今も生きつづけている。

襲をも いまだ解かね、
嬢子の 寝すや板戸を、
押そぶらひ 吾が立たせれば、
引こづらひ 吾が立たせれば、
青山に 鶴は鳴きぬ。
さ野つ鳥 雉子は響む。
庭つ鳥 鶏は鳴く。
うれたくも 鳴くなる鳥か。
この鳥も うち止めさせぬ。
いしたふや 天馳使、
事の 語りごとも こをば。

(歌謡番号二)

古事記の歌謡は「事の 語りごとも こをば」(この次第はこのとおりです)とあるように、貴人の走り使いをする部族、天馳使に託した伝送の形をとって、ずいぶん迂遠な表現みたいに見えるが、ほんとうのところは「かわうそとかわうそとかわうそのはなし」における反復と急迫と同じ構造を有して、あるトランス状態の訪れとともに、語られたか、歌われたかしたものだと考えられる。それが韻律的なのだ。

あるいはこうも言える。果歩作品の神話性は夢の世界の構造をくぐりぬけてゆくものでもある。この種の作品は「かわうそ」の詩のほか、「車庫の奥のかみさまの象の夢」「毒のある魚の皮をなめしてつくった反物で一等賞になった女のはなし」「わたしはあのヘアピンカーブのさきつちよの坂ののぼりぐちのところのバス停で待つ」あたりが代表格で、少し異質だが夢の性格が濃厚なものに「剥き目裂き目」「鳥覗き」「右の船 左の船」がある。これらはある脈絡というかりそめのかたちをとってはいるが、じつは色んなところから持ってきた「材料」を寄せ集めて出来た「物語」の印象がある。私たち読み手はじつに断絶的にある脈絡から別の脈絡へ連れてゆかれ、引き回され、唐突な終わりをみる。

「車庫の奥のかみさまの象の夢」で言えば、「わたし」は車庫のところを寢床に貸してもらっているが、そこは危険になってきたので

いられなくなり、「奥に奥にながほせい」マンシヨンの一室を紹介してもらい、金髪のカナダ人の少年と友達になったりしたが、「仕事を一日やすんだら」かつておなじみであった悪盤に取り憑かれて、白いベッドのうえで点滴で身動きがとれなくなってしまう、少年とも別れなくてはならなくなった。以前に寢床にしていた車庫の奥のところは、「わたし」がいるあいだ、来なかった「悪いおじさん業者」がまた黒い油を捨てに来るようになって、その近くには「死んだ猫たちがつまかさなつた」「ネコボタ山」があることがわかった。それから「いろいろなことから逃げる経路として」車庫の奥の細くて暗い道を抜けると、「オレンジのまる電球のあかりできれいな」象の部屋がある。「象がそこにはいて、どんないけないことでもなおしてくれたり／なおせないときには、お話をただふんふんと聞いてくださったりする」。

これはどんなに支離滅裂に見えようと、深い存在の危機からの救済の物語なのである。昨今のテレビゲームのイメージもあるが、テレビゲームに収まってしまいうメタファーではなく、テレビゲームのイメージを借りた、さらに割れていって世界の岩盤を覗かせるようにひらかれるメタファーとでも言えばよい。ここから色んな寓意や象徴を読むことができるが、まず言えることは、「象」は当然「かみさま」ではあるが、追放され、さまよい、病気にまでなってしまう「わたし」もまた一柱の、追放され、流浪し、病み傷つく「神」であるということだ。本当に怖ろしいのは、こうした「神」が病み傷つくことによつて拡がる心の疫癘だ。人が詩人であるとは、本当はこういう自覚と予知をとまなうものなのだ。ここで立ち止まって果歩作品を眺めれば、いわばふたつの傾向、流れが見てとれる。ひとつはいままで引いた作品もそれに含まれる「叙事・神話」性がいちじるしい流れ。もうひとつは、これは「抒情」性とはかぎらないが叙事・神話「以外」の性格を持つ流れ。「あとおとふ」「Blumen」「黄花信仰」「これ

もまたいつかみた景色」などがそれにあたる。

このなかで、それが夢の体験のようにどんなに**恣ほしなもの**に見えたにせよ、ある構造的な骨格を感じさせるのはむしろ「叙事・神話」群だが、そのコアの部分のあまやかな果肉は、叙事・神話「以外」の流れ、「抒情」詩とはかぎらないが、いわば「歌謡」のような作品により顕著にみとれる。

「書く」と悲しみが増すので／書くよりもさげなく口にするほうがよりよい」「ひらがなはひとを守るためにある」（以上「あとおとふ」とか、「ひとがするべきことは、ほんとうにあるのか／ひとはしなくてもいいことばかりしていて／するべきことが本当は、ないもないことを知らず／焦りつづけてきた結果／自分自身を追い詰めたの」（「Blumen」）などがその端的な詩句だろう。ここにみられるある種の厳肅な感じはなんだろうか。それは「叙事・神話」的な作品を動機づけるものでもあるけれど、この両者を深い本質としてつらぬく厳肅であまやかな部分をひとことと言い表せば、それは彼女の持つ「道徳」性なのだと思ふ。

さつき「さまよったり傷ついたり戦ったり平らぎを得たりする語り手」とか「追放され、さまよひ、病気にまであつてしまふ『わたし』」と書いたが、そこでの勝ち負けや傷つくことや負の時間に投げ込まれることに対して語り手は恐怖するのではない。彼女が真に恐れるのは、深い道徳の無視や欠如、その腐食がもたらすものだ。私たちは、目立たないかたちながら、「従順」という言葉が二か所で記されているのを見とめることができる（「黄花信仰」「これもまたいつかみた景色」）。また、ある作品の末尾に「やくそくやけつえんというもののある世界に戻れないことが／取り返しのつかない、さいあくのようにおもっています」（「内へ」）という詩行が唐突に置かれているのを見る。

やや性急に言えば、神話とはこのような喪失感が却って反照させるようにさししめすもの、およびその喪失からの回復の手立てと密

接な関係にある。そういう意味でも、この詩集は「神話」的なのである。また、逆に、「神話」とはたんなる荒唐無稽さとは全く違った、その荒唐無稽さの彼方に、人を律するものを「構造的に」持ったものなのだともいえる。この詩集において「神話」にもとめられているのは、たぶん深い「道徳」性のたてなおし、なのだと思う。それを取り巻く現実、たとえばこんな感情をともなっているにしても。

揺れるのはそとがわだけではない
揺れるのは存在しているかどうか分からない、
そのようなものではない

揺れるのは確かに存在している、内視鏡で見える部分
静かなこととおそろしいこととおだやかなことと残酷なこと

となりの部屋どおしで聞き耳をたてている
いつだつてとなりあうことで存在している

（「野薔薇とアスチルベ」）

こどものころなきながらめをさましても
わたしはひとりやみのなかにいた

あなたがわたしのなまえをそのやさしいこえ
でよんだとき

いきていてもいいとおもった
じゅうねんごろしのようにわたしのくびをま
わたでしめるように

手をはなしてしまつてからはいまがたえると
き

（「Milchtraum」）

この喪失感、恐怖感、寂寥感と、ある種の諦念には、私たちの世代として、胸を突かれるものがある。彼女や彼ら、私たちの姪甥にあたるこの世代以下に訪れているかくのごとき現実。世界は、いつの間にかこんなふうになつてしまったのか。このとき、書物の奥付から物語外的に逃げようとしている大切な小鳥の影がある。佐々本果歩詩集『姉妹』の中の語り手は、巫覡まじないの威儀を正し、厳肅な託宣としてそのことを告げんとするかのようである。

confidence

ジル・ドゥルーズのインタヴュー・ドキ
ュメンタリー『アベセデル』を観た。
恐ろしく伸び、内側に巻いた爪をしてい
た。それは巻き戻したカセットテープの、
先頭個所みたいに透明だった。「死後公開
だよ」と念を押し、彼は画面から消え去っ
た。(後藤)

移住とは、その土地と風景に馴染むこと
以外ではなさそうだ。それほど土地と風景
の力は強い、と覚悟した方がよさそうだ。
今の時代、土地も風景もその強さを隠して
しまっているかも知れないが。(木村)

初めての方、初めまして。そうでない方、
お久しぶりです。最後にリアルな詩集を作
ったのは2000年の『頭の名前』(書肆
山田)で、それからインターネットでそ
れらしきものをまとめるに留まっておりま
す。先日、『人類以外』というのを作りま
した。 <http://www.longtail.co.jp/exc/>で
す。よかったら読んでください。(長尾)

僕の人生の伴侶である「みみねこ」ペた
るは、とても神経質な猫です。僕以外の誰
にもなつきません。ある人にそのことを話
したら、「猫は主人に似るのよ」と言われ
てしまいました。僕はそんなに神経質でし
ょうか? 確かに強迫神経症ではありません
が、どんなものでしょう。本を買う時は、
平積みになった書籍の、一番上からは取ら
ず、4〜5冊目を引きずり出してレジを持
っていきます。僕にとって、本は「もの」

ではありません。たいせつな、コレクション
ンなのです。ですから、本の大敵、水に濡
れた本は、もう一度買い直します。人と会
った時、相手に本を手渡す際は、「どうか
がばつと開かないでね」とお願いします。
ハードカバーの表紙が、ゆるゆるになっ
てしまるのが耐えられないのです。では、僕
はどのようにして読書をしているでしょ
う? 書店で購入した本を本棚に並べたあ
と、図書館に行つてさつき買ったばかりの
本を、リクエストするのです。行きつけの、
渋谷区立中央図書館は、僕の第2の書齋で
す。新刊本が出てしばらく経つと、誰かが
どこかの図書館にリクエストを出してしま
うかも知れませんが、新しい本が出
ると、僕は真つ先に図書館へ向かうです
(まあ、僕がリクエストするのは、たい
てい詩集なので、僕のほかに、ライバル
はあまりいないのですが)。
そんな訳で、僕はやはりべたるのように、
神経質な猫のような人間なのだ、と思う今
日この頃なのでした。(野村)

浅学でお恥ずかしいのですが、最近にな
り、宮沢賢治「春と修羅」の、修羅に込め
られた意味を知りました。修羅は六界のう
ち、人間よりも下・畜生よりも上に位置し、
賢治はここに自らの位相を見出したとい
うことです。

人の住まう世界から一步引いて、人でな
いもの場所から見渡すこと。柔らかいゲ
ルのような視線が縦横無尽に駆けてゆくけ
れど、それは分厚い苦悩のレンズを透過し
得たから、美しいのだろうか。

学生時代、外科学の最初の講義で、教授

が開口一番「外科の外は外道の外だ」と、苦悩を含んだ低い声で言い放ったのを覚えています。私自身は手術がどうにもこうにも苦手だったので、外科系の医者になることはさっさと諦めました。現在私は小児科医ですから、自分でメスを握ることはありません。しかし担当患者さんの手術に立ち会ったり、帝王切開分娩に立ち会い、出てきた新生児の蘇生をする機会は多々あります。仕事は無心でこなしますが、ふと我に返る瞬間、やはり手術室の雰囲気は苦手と感じます。

この間、薬剤のアンブルを切った際、破片で自分の指を傷つけてしまいました。割と血が出ましたが、「ああ、これは私自身の血なのだ」と、わざわざ認識しなければならぬ自分がいました。次の瞬間、意外にも私は安堵していました。何故ならよく考えれば、日常、私の手に血がついているとすれば、それはほとんどが他人の血だからです。こどもが泣きわめいて暴れても、必要とあらば無理に押さえつけて、点滴針を刺しているからです。

「医者とは人であるか」と自問する詩を書いたことがあります。それは自問しつつ、最後に医者が消えてしまう内容でした。もちろん現実の私は消えませんが。賢治の「修羅」の意味を知り、彼の作品に救いを求めるようになったかもしれない。「雨ニモマケズ」だって「サウイフモノニワタシハナリタイ」であり、「サウイフ人」とは書かれていないのです。(鈴川)

この私は自分の人生にとって、ほんの端役、エキストラにすぎないのではないだろうかと想像してみる。自分の人生はとてども広大な、ちように古代の中国の帝国のようであって、皇帝がどんな命令を下してこの国が動いているかわからないというよう

な。主役がたとえば皇帝であるとしたら皇帝の顔も名前も知らず、どのような決まりや仕組みでこの世界が動いているかもほんの少し、かすかに風のうわさでしか伝わってこないという感じ。そんなことにかまっていられないから、日々薪を割り、季節を感じ、なんとなく掘っ立て小屋でお茶を飲んでいるというような私。

カフカの小説にもこんな話があったので、思い出してアレンジした。自分の人生の主人公は自分ですよと強要されているような現代にあつてこの仮定のほうが案外充実していきやすいような気がする。しかし、安心したのも束の間、いきなり主役になる日が訪れてしまうかもしれないのである。自分の欲望は全く気づかないうちに自分を生の当事者へ押し上げているということがあるからだ。そうだったからといって、自分が何者かわからない。だから教えてほしいと思う。私の場合こんな形で人を好きになることが多いのかもしれないと経験上思う。まるで映画『千と千尋』の「顔なし」である。不気味である。「顔なし」は散々人を食ったりして大きくなったあげく再び元の大きさに戻る。そして千尋と片道切符で「ばあば」のところへいって糸巻きの能力を認められお手伝いとして住まうようになる。恋愛の彼方とはそのような場所であるかもしれないのだ。(石川)

夕日の中、鹿児島から屋久島へ渡った。あつという間の空の旅だったけれど。そこで見えた黄金の広がり、およそ人間が経験しうる、最も純粋なものの一つのように思われた。大隅半島を離れたばかりの頃は、眼下の雲はまだ薄く平らで、そのむこうには少し唐突なくらいに暗い橙色をした漣の群れが透けて見えていた。やがて雲はもくもくと湧き立ちながら、全体に起伏を帯び

始めた。小さな雲の玉が大きく波打ちながら並ぶさまは、色の白いことを除いては、照葉樹が埋め尽くす山並みと異なるところがなかった。自然が見せる直喩的な表現に驚きを感じた。そんな光景の中で、人間の言葉に可能なのは本当は叙景だけなのかもしれないと、考えたりもした。(高野)

ソクーロフのドキュメンタリー映画「人生の祭典」(原題は、どうも「人生の悲歌」のよう)をテレビで観た。プロコフィエフは学生のロストロポービッチに、暗にシヨスコタコービチを指しながら、現今の作曲家はみんなマラーリヤに罹っている、と苦々しく言ったそうなの。

——マラーラーという病。

WAS GEHT IHM WOHL IM KOPF
HERUM? は、グスタフ・マラーラー作曲『嘆きの歌』より——王は一体なにに心を奪われているのか——。(和田)

ことしは萩の花が長かった。いつもは気がつけば咲いていて、忽ちに散りきってしまうのを常とするのに、一つの枝先から別の枝先へ、ある意味で静心もないように、花をつけつづけていた。日本の中世に義堂周信という臨済に属する詩僧がいたが、ことしの萩の開花期の長さというよりは、落花期のとりとめもない長さは、彼のこんな詩を思い起こさせる。

そていあきまさにくる
祖庭秋正晩。叢社与誰群。
毎憶香林遠。更憶真浄文。
宗風懸一髮。隻臂寄千斤。好在東山下。
花開七葉分。

すなわち、世界にやって来た凋落の秋を知って、ひそかに心構えをするという内容

だが、われわれにとっても、いまだ希われ
たトポスとしての「香林」は遙かに遠く、
「真浄の文」はさらに深く思われるのである。
(倉田)